奥三河　県境の山間寒冷地の教員住宅暮らし

5日に1回の水源の当番

話し手／匿名希望

家族ぐるみの転勤生活

お父さん（夫）愛知県の山間地の小学校の教師をしていて、転勤すると家族ぐるみで移り住んだ。家にはオートバイがあったけど、当時はまだ自家用車の少ない時代だったから、勤務地が遠い所だと引っ越しをするのがあたりまえだと思っていたの。

私は新しい所へ行く時はどんな所だろう、どんな人達がいるだろうっていう興味がすごくあって、とても楽しみだった。不便な所は不便なりの面白さがあるでしょう。

古真立（こまだて）の教員住宅

昭和41年から昭和43年までの3年間、豊根村の古真立小学校に転勤した時は、曽川っていう35軒くらいの集落に教員住宅があって、そこに住んだの。上の娘が4年生、下の娘が保育園の時。小学校まで山道を歩いて50分くらいかかる所だった。

はじめ行った時にね、下の子の遊び相手がいなくて困ったなあと思っていたら、近所に同じ年の女の子の双子がいてね、そこの家に一緒に遊んでほしいって頼みに行ったらすぐ遊びに来てくれた。素朴で丸い（人なつっこい）子達でね。来たことはいいけど、畑で遊んでいたのか手も足も真っ黒。「おばさん、上がっていい？」って言うのを「ちょっと待って」って雑巾持ってきて手も足もふいて「はい、いいよ」って言ったら、集落中に「住宅に行くなら手も足も洗って行け、けっこ（きれい）にしてないと上げてもらえん」って伝わってしまった。

日用品の買いものは

日用品は石堂（下黒川）の坂口屋まで行くとそこそこのものがあったけど、遠いからお父さんのオートバイに乗せてもらわないと行けなかった。曽川にちょっとした食料品を売る店があって、はじめ行ったらね、買う物何にもないくらい、ほんとうに品数が少なかったの。店に行って、あれがないか、これがないかと言っても「あー、置いてない、置いてない」っていうことが多かったの。

古真立小学校には先生が8人いて、5人は家から通っていた。私達のほかに家族で教員住宅に入っている人はいなくて、家を借りている人も、奥さんが時々来るけど普段は一人、土帰月来の単身赴任だね。その人達は帰った時によそからどっさり品物を買って持って来るから曽川の店には用がないの。それが3年いるうちに、私達の頼んだ物を十分仕入れてくれるようになって、まあまあここの店であるもので（毎日の暮らしを）しようということができるようになっていった。

曽川の店に野菜は売ってなかったけど、近所で時々いただいてそれで間に合った。近所の人達は茄子でもきゅうりでも大きく育てて粗末にしないように大事に食べるの、見習わなくてはと思ったね。でも、どうして小さいうちに採らないのかなあと思って見ていたら、小さいうちはもったいなくて採れないの、質素な人達だから。私は小さい茄子が欲しかったので、隣の畑を借りて苗を3本くらい植えてね、私が欲しい大きさになったときに採りに行ったの。畑がちょうど隣のお勝手の前にあって、おばさんがお勝手から「奥さん、そんな小さいのとるだかん、もったいない。こっちの（茄子）あげるで持って行きん」って、大きな茄子をくれるの。

何とかおばさんの見ていないうちに採りたいなあって思ったけど、とうとう小さいうちに採れなかった。本当に親切で、私が遠慮していると思ったのね。

5日に1回の水の当番

組の仕事はだいたい外してくれたと思うけど、衛生当番と水の当番は回ってきた。衛生当番はトイレを消毒して回る仕事、白い消毒液をジョウロに入れてね。

楽しかったけど苦しかったのは水の当番。5軒で1組だから5日に1回、（水源を）開けたり閉めたりする当番が回ってきたの。住宅から水源までの距離は、向かいの山だから250mくらいかな。一本橋で川を渡って行くのだけど、長さが6mくらい、けっこう渡りでがあったね。橋は幅が25㎝くらいの厚い板が渡してあって、とにかくよそ見ができないの。水（面）までが約2m、子どもが溺れるくらいの水量だから。ここで子どもが2人橋から落ちて死んだという話を、はじめて渡りだした時に聞いて体がゾクーッとしたね。手すりなんて何にもないでしょう。

水源はひと山登ってちょっと奥のところ、水の当番は女の人の仕事で1年中、朝晩水源に行くの。水源がこわれた時は男の人が出て行くと思うけど、葉っぱが詰まって具合が悪いくらいは女の人だけで直していた。

暖かいうちはホースに詰まるゴミを取りに行くだけだから、雨が降ってホースが詰まらなければ仕事はないんだけど、当番の日はその日の責任者として毎回休まずに行った。忙しい人は、何もなければ行かない人もあったけどね。

水源の中はホースが水の中にただ置いてあるだけだから、落ち葉が詰まりやすくて、今日はどうして水が来ないんだ、落葉か詰まったかなっていうと、当番がまた見に行かないといけない。落葉を取り除いて水が通るかどうか、また試しに（山を）降りて確かめないといけない。今のように携帯でもあれば下の人に「出たー？」って聞けるけど、それがないからとにかく降りてきてね、「出た」って言うとそれじゃってまた山を登ってホースをしっかりつないで、っていう具合で、まあ、水が一番難儀だった。

冬は水が凍るから

冬になると夜はホースを外すの、凍るから。そうして朝はつけに行く、みんな朝は水を使うからね。朝の当番はちょっと早めに行く、でも暗いうちには行けないから周りが見えるようになる6時半くらいかな。

冬になると橋の上に雪がこれくらい（3㎝）積もって凍るから、洗面器にどっさり川砂を拾って、それを撒きながら橋を渡るの。お父さんは、私の当番の日は、いつ川に流されたって知らせが来るかと思って、仕事をしていても落ち着かなかったって、よく言っていたよ。

水源の水が凍ると金槌持って行ってボンボン割って溶けやすくしたり、水が通るようにしたりするの。氷を割ると水を吸い込むけど、水が下まで行くか分からないの。何回も登ったり降りたりしてね。仲のいい奥さんがいつも一緒に行ってくれて、心強かったけど、1人じゃちょっとね。

水源からとった水は山からホースでね、ずーっと道を渡って各家へ枝のように分かれていくの。家々に地下で全部渡してね、地下っていってもそんなに深くはないから、それがまた途中で凍る。そうするとね、5寸釘と金槌でと穴を開けてどこまで凍っているか確かめるの。ちょっちょっとね、釘を刺してみると、ここは凍っとる、ここは水が出るでここからは凍っとらん、ってやるの。それから凍ったところにやかんで熱いお湯を汲んできて、かけて溶かして、それでその穴を割り箸を削って埋めるの。そんなことを繰り返してホースが穴だらけになっても毎年続けていた。

勾配の急な山をすべって降りたら

水源のある山もけっこう急でね、私は慣れないから怖くて、登る時は這ってでも登れるけど、降りる時は座ってお尻をつけて降りてきた。立って降りると前へつんのめりそうで。それがね、そこの生え抜きの人は手で枝の先をつかみながらタカタカッて降りる。それが早いの、身軽で。隣の奥さんは私よりちょっと若かったかな。その奥さんがタタタッ、タタタッと飛び降りて行くの。もう私はびっくりして、お尻をつけてズズズッとすべって降りてきたら、山の道下にある家のおばあさんに、「奥さんが山からお尻をつけて降りて来るのを見ると、わしゃ風邪をひいとっても危なくて寝ちゃおれん」って笑われたこともあった。

3年の間に私も達者に行き来できるようになったけど、はじめはこんな所を登ったり降りたりするのは大変なことだと思っていた。でも日曜日に当番があると、子ども達がお母さんと山へ行くって言って、けっこう喜んでついてきてくれてね。

山から引いて来た水は流しに届くだけだから、お風呂は流しからバケツで一杯ずつ汲んで運ばなくてはならなかった。たきぎは集落の人に頼むと持ってきてくれたり、周りの山から取ってきたり、半ば自給自足だね。「間伐材を要らんかね、ひきにおいで」って言われて、お父さんがノコギリを持って行ったりしたね。

新豊根ダム着工の前だったので

古真立の道路は舗装がしてなくて、土埃が立って洗濯物を乾すのに困ったくらい。ダムの工事が始まる頃だったから、トラックが結構通るの。狭い道だからトラックが通ると山側に避けて体をよじるようにしないとならない程で、そのたびに怖い思いをしていた。

隣の家に上がっていく道が細くて、雨が降るたびに泥が流れて下へ溜まるの。雨が上がるとおじさんがその土をすくって上へあげる。雨が降るたびにそれを繰り返すから、私、コンクリをかぶせればいいのにと思ったけど、ダムが間もなくできるからと、もう何年もそうやっていることが分かった。そんなふうにダムを控えた暮らしはみんな小さな事をずっと我慢していて、苦労がたくさんあったんだよ。

台風で集落が孤立した

一番ゾッとしたのは台風。台風で家の前の道が崩れたの、住宅の前の道に置いてあったオートバイごと道が崩れて落ちて流されちゃった。家のオートバイではなかったけど。川までの高さが40mくらいあって深いじゃない。それがザーッと崩れた。家が1軒流されちゃってね、曽川の下流の田鹿っていう集落の川沿いにあった家で、小学校の子が2人おった家。お父さんが朝出勤したときに、ボーッと立っておった。「どうかしたのか」って聞いたら「家が流れちゃった」って言ったって。

住宅も6畳2間の奥の間の下の石垣がガーッと崩れちゃったから部屋が宙に浮いちゃった。部屋の下が抜けて、お勝手と、残りの1間で10日くらい暮らしていたけど、住宅は割合早く直してもらえた。

学校へ行く道も崩れてね、普段でも子どもが3人は並べないくらいの幅の道、それが崩れて人1人やっと通れるくらいの幅しか残ってない所が4か所あって、お父さんが先に通学路を調べたら、下までザーッと崩れていた。こんな所を子ども通わせるのは辛いなあって思ったけど、それでも誰も転がり落ちなくてね、毎日通ってほっとした。子どももそれなりに気をつけるんだね、道幅がないから。自分で通ってみて、ここを毎日行ったり来たりするのはえらい（大変だ）なあと思ったよ。

飛行機が来て援助物資をどこかへ落としていった、っていうくらいの孤立した集落になってしまったの。でもその援助物資なんか誰も見たことがなかったもの。どうなっちゃったか知らないけど、落として行ったげな（行ったそうだ）というだけ。私達が聞いたのは、落として行ったげなというだけの「げな話」。

孤立していたのは1週間くらいだから長い期間じゃなかったし、米はあったから粗末なものでもそれなりにおかずがあって、おなかをすかせるようなことはなくて過ごせた。

一番困ったのは水、10日くらい出なかったの。でも、教員住宅の近くが割と高い山で、その山から段段畑が2，3枚あった所の石垣から大量の水が出たの。それを溜めるとお風呂へも溜められるくらいの量の水だったから、その水で何とかしのぐことができたのは助かった。でも水が出るところは崩れやすいって聞いて、後から考えるとおそろしかったね。

今でもお付き合いをしている

曽川は集落の人達が丸い人達で、親切で優しくてとてもいい人達だったから、苦労が全然苦労じゃない、やっぱり人の丸さが全然違うもの。気の毒になるくらい親切で優しくて嫌みがなくてね、いいところだった。いまだにお付き合いがあるよ。

昔は私達が町の人だと思われていたけど、ダムで移転して行った人達は町住まいが長くなって、今は私達の方が田舎の人になっちゃった。手土産におしゃれなお菓子をいただいたりしてね。

豊根村古真立（こまだて）地区

豊根村は愛知県の東北端、長野県と静岡県に境を接する山間の村。その昔「この奥に人の住むかや豊根村」と言われたほど交通の不便な土地だった。古真立は豊根村の東南部の、村でもとりわけ山深い地域である。高度成長期に佐久間ダム、新豊根ダムの2つのダム建設によって水没、または生活の維持が困難になり、5つあった集落の住民が離村を余儀なくされた。

新豊根ダムの建設時には昭和43年から昭和45年にかけて古真立地区の曽川、田鹿の全世帯75戸が水没し、うち1世帯を除き村外に転出した。2015年10月の国勢調査による人口は37人（16世帯）である。

（注）

＊新豊根ダム

新豊根ダムは、治水と発電を目的として天竜川上流の大入（おおにゅう）川に建設された多目的ダム。

昭和37年電源開発（株）が調査に着手、新豊根ダム貯水池と佐久間ダム貯水池の落差約を利用する発電専用ダムとして、昭和43年に建設に着手した。

天竜川流域では、昭和43年、昭和44年に相次いで大出水に見舞われ各地で洪水被害が発生、新豊根ダムは治水と発電の機能を持つ多目的ダムとして再出発することになった。

昭和48年8月31日に完成した。

＊台風10号　昭和43年8月29日

三河山間部では台風の接近前に前線の活動によって4日間で550㎜を越す雨が降り、各地で河川の氾濫や崖崩れなど甚大な被害が発生した。豊根村も316件の公共土木災害、住家の全壊9件、半壊3件、床上浸水16件、床下浸水94件という村始まって以来最大規模の災害に見舞われた。

聞き取り／2018年8月
聞き書き／伊藤直子

次号テーマ「葉で包む（葉に載せる・葉でふたをする）」
2019年4月頃発行予定
寄稿は編集部まで

上勝　大工さんちょっとコラム

土蔵　火と水を防ぐ工夫

話し手／山中　昇（82歳：昭和11年生まれ）
聞き取り地：徳島県上勝町福原

○大黒柱について

大黒っていうたらケヤキでみなするけんな。大黒の奥に小黒っちゅうんがいっとるな。なんで入れるんか知らんけんど、荷持つためでないんな。五重塔みたいに中心、大きなん入れるっちゅうんではないんだ。大黒小黒って、まあ一つの家の、男と女がおるっちゅうような意味ちゃうかな。どうしてもなかったらしょうない、っちゅうんではないんだ。お床に床柱するようなもんで、家の飾り、誇りじゃな。

○土蔵

戦後に土蔵を建てかけたんだ。貧乏人が蔵いるっちゅうて。火災で家焼けたらおぶげんしゃ（※）の人は、すぐに建て替えできるけんど、貧乏人は財産のうなったら困るけんな。着るもんとか、重要なもんとかを蔵ん中に入れるっちゅうんで、日浦（集落名）だけでも五軒建てたんだ。上勝では蔵建てる大工、あんまりなかったんだ。建て方でも普通の家と全然違うし、蔵の壁する左官さんも少なかったけんな。わしは責任もってせんかったけんど、うちのおやっさんが建てたんで、ついて行ってようけ（たくさん）建てたけんな。

土蔵は屋根の上まで土のしてあるけんな。ずーっと、ぐるりーっと。火災あっても屋根は燃えてひまうけんど、中に火は入らんの。ほいてええ家だったら、蔵の戸が観音開きで、くしゃーっとふせるようになっとる。普通の家は引き戸でな、がーっと引きこんでくる。ほいて常に味噌の悪いん、蔵の外へ置いといてな。火災の時は隙間のく（所）へ、味噌を塗りよったんだ。味噌は火で焼けても溶けもへず、火が入らんけんな。

戸は、泥戸があって、鉄戸があって、簀戸（すど）があって、三枚ある。泥戸は十センカ、十五センぐらいあるんかな。板打って土塗っとるから重たいんだ。土戸っちゅうたらいいんな。ほいて上に、壁と同じ白の壁塗ってある。

泥戸は普段は大概開けとって、鉄戸を閉めとる。鉄戸は鉄板で張ってあって、ほいてほの内側に簀戸がある。簀戸は、木で簀子（すのこ）になっとって風通すんな。二重扉で二重の錠前してあるんで泥棒は入れんのな。

蔵は左官さんの技術相当いるけんな。雨風来ても壁が落ちんようにしてある。上塗りや、普通の石灰じゃあかんけん、貝を焼いて粉にしてな、食用油みたいな油で練って塗っとるん。ほんで雨降っても水はじいて浸み込まんの。壁が雨で黒うに、苔生えたようになっとるけんど、五十年しても六十年しても剥げてきよらんでえな。こぼれるっちゅうんは、何かで傷して、また漆喰しときゃあいけるけんど、管理しよらんのな。中、土やけんな、水含んだらぐざぐざぐざっーと崩れてくる。普通に守りしよったら落ちんのな。

ほいて大きな家だったら、納屋があって、母屋あって、乾のほうに蔵があるもんなんじゃ。徳島のほうで、昔からの家の人が土蔵見て、直してくれへんでって言うてきてな。行たら横へらが人間出入りできるくらい崩れとる（※）おぶげんしゃ…お金持ち

○話し手プロフィール

山中昇さんは、昭和十一年上勝町福原生まれ、福原在住

大工の棟梁。中学卒業後、父親や兄が大工だったということもあり、大工になる。兄が公共施設の建築を請け負う会社を設立したため、上勝町内の公共施設の建築に携わる。また、真面目で丁寧、細かい所もやってくれるという仕事ぶりが広まり、町内外での個人住宅も多数建てる。現在もリフォーム依頼や、小さな小屋などの注文がひっきりなしにある。詳細はかみかつ山の聞き書き④。

聞き取り／2018年1月
聞き書き／原田寿賀子

（3面から）

のうちにだんだん自分の中で、鮎を焼く技術、甘露煮を作る技術が進んできて。

少なくともまず千匹ぐらい焼かないとうまくならんですね。炭を盛り上げるように積みまして、その周りにずーっと口下にして立てるんですね、で、回りを、ドラム缶でやる人もいるけど、僕は、トタンですね、アイン引きとか、平らなやつで輪っかを作って、輻射熱で裏からも焼けるようにして。で、その炭もできるだけいい炭。備長炭はだめです、火力が大きくて火がおきるまでにえらい時間かかるので。普通の黒炭でいいんだけど、いい黒炭を使う。火力を強くして。そうやって焼くとおいしい。

甘露煮でも火にかけるのは20分です。骨までやわらかくしようとは思ってませんので。あと一晩置くんですね。味をしみこませる。そうすると、時間かからん。とにかく、釣るほうで疲れちゃってる。全力で釣ってますから。20分ぐらいで勘弁してくれって。ただし焼くのは50分かかる。だけど、もう経験で、このぐらいであとは30分後に見に来（く）やいいなっていうもんです。

日本中の川が魅力を失った

僕は今は釣ってないです。日本中の川が魅力を失ったんです。僕がここから通って釣りに行ける範囲はもうだめですね。鮎の性質がとにかく違う。何が違うのか分かりませんよ、釣り方が全然違う。

今はとにかく、飛ばしちゃいかんし、ゆるゆるーって行ってそこにポイントに行ったかなと思ったら、ずーっ待ったらんといかん。そこへ入って一息、5分とか待たなければ釣れてこないっていう釣りなんですね。そんな釣りようせんもん。

今の鮎全然違うんです。近寄ったら逃げていきます。舟で近寄ってっても逃げていきます。攻撃性が落ちた。昔は鮎がツルツルに石をなめてピカピカにするから、川がダイヤモンドみたいにキラキラキラキラ輝いているんですよ。今は鮎がいてもちょっともなめてくれない。何食べてるんだろう、分からん。

釣れなくなった当時、潜水調査とかいろいろやったんですよね。そうすると、とんでもない深みの、巨大な石の、しかも根っこの部分をなめてる。隠れて。どこにおったんだお前らって。そりゃあ、原因はこれじゃねえかっていう単純な話ではないと思います。

昔から放流してたし、やっとることとってあんまり変わってないですよ。川の水量とか川の透明度なんて変わってないですよ。何が違うんだって、分かんないですよ。天下の長良川でも釣れなくなったし。四万十もだめだし。高知なんかよく行ったんですけど、川が短いんですね、四国山脈があって海まで距離がないもんですから。で、人がいないから、川なんか昔の姿のままできれいなんですね。で、釣れたんです。何年か前からやっぱり四国もだめになって、そっからもうガタガタになるんです。ある時期を境にしてっていうのは、一緒なんですよね。豊川にしても矢作川にしても、長良にしても、その始まりの時期が違うだけで、その現象が始まるとガタガタになっちゃう。

矢作川では1990年ぐらいを境にして。劇的でしたね。

昔は、解禁前にずーっと上流川下流まで川を見に行くんですよ。そうやるともうピカピカになって、「早く解禁にせんかや」と思った。すみずみまでピカピカです。ピッカピカです。チャラチャラな浅いとこまでピカピカです。もう川じゅうピカピカです。それがねえ、あるときを境にして、突然、「あれえ？　全然なめてないじゃないか」って。ほいで、流れの芯のいい石の下だけがなめてあるっていう状態だった。それが下流と上流とは1年、2年多少違いがあったと思う。何かの臨界状態に達して、突然現象として激変したように見える、だけども静かに静かに変化は進んでいたということではないかと思うんです。

釣りをやってないと分からないです。だけど、魅力がなくなったら釣りをやらないもんで。毎年行こう行こうと思うんですよ。心にむち打って、おい、行けよって。だけども行く気にならない。

で、鮎より少し遅れてアマゴを釣り始めて、アマゴの記録も同じようにずっと付けてたんだけど、今アマゴもだめだね。アマゴは上流だから、川がいいとこで釣るでしょ。だから鮎よりは長くもったんだけど、アマゴもだめになった。いなくなった。育たなくなった。だからいきおい成魚を放流するようになった。あれ釣ったらもう二度とこの川では釣りたくないと。養殖して大きくしたやつですよ。釣り人が増えたのかねえ。魚も育たない。

自然は単純ではない

東海豪雨の後、水辺公園を直したら川底が石垣みたいに平らになって動かなくなった。それでもう魚もいないだろうと思っていた。その後、沿道が入って川底の砂利を重機でひとすくいしたら、びっくりしましたねえ、イシャンコがどえらいことといたんです。かつて川底の見えるところにいっぱいいたのが、川の中から出てきた。深みの石と石のすきまのわずかなとこにいたのか。それにしては数が多すぎる。それと、キンパクっていう釣り餌になるカワゲラも無数にいたんです。川の深みの、普通のスコップだとかそれではちょっと動かせないような石の下に地中の世界がある。

見た目だけじゃ判断しちゃいかんなと思う。川で起きとるいろんな変化もね。家庭排水がいかんだとか、ゴルフ場がいかんだとか、いろんなこと言われましたよ。だけどね、そんな単純なもんじゃない。自然界で起きとる変化の原因っちうのは。

聞き書き／清藤奈津子